

Community & Friend

2025 年 10 月号

有限会社アルファ
大阪府高槻市氷室町 4-13-3
吉田 清一郎

過去の月間通信は <https://www.alphar-net.com/monthlymail.htm>

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 10 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。



私より遅く起きてきた彼女が、差し出した画像がこれ。
明ける前に起きていたので、気づかなかった。ここは東
向きに寝室があり、南向きにリビングがある。朝陽を感じ
て目が覚めるって感覚が好きだったが、残念ながら
最近、陽が昇らない内に目が覚めてしまうようになった。
ひと昔前は、同じように早くに目が覚めてしまう北
海道の大川さんと朝っぱらから電話で話したりしていた
が、最近、互いに遠慮が芽生えて来たのか、この時間
帯は御無沙汰になっている。

さて、気持ち良さげついでに、先日志賀高原に行っ
て、湯殿に浸かって久しぶりに時を忘れた。時を忘れる
とは自分が生きているのか、死んでいるのかが分からな
い状態だということ。もう少し言うと身体感覚が無く
なって、唯意識だけになる。確かこの宿は 4 度目の筈
だが、こんなにいい湯なのに覚えていなかった。後で入
って来た私より少し若そうなおっさんに、湯船の真ん中
から少し譲った。同じように彼も身体感覚が無くなっ
ている。さすがに少し熱さを感じて、湯船の縁に腰掛
けると、隣で同じように一瞬の間を置いて腰掛けた。こ
こもこの週から気温が下がったらしい。

本当に、同期というのはあるもので、私が肌寒く感じ
て湯に戻ると、先ほどと同じタイミングのずれで彼も湯に
浸かった。『気』という不思議な、でも確かに存在の
大きな物とも言えるし事とも言えるこのエネルギーは、
この宇宙のすべてに関与していて、関与しているところ
か此処から宇宙が生まれたのだろう。だから生きている
か死んでいるのか分からない状態にまで戻ると、この湯
殿を支配している気に、隣のおっさんも私も素直に一
体になっている状態を同期と呼んでいるだけなのかも。
そのように考えれば、納得いく事柄も数多あり、この気
の力に従えば、為す事も為し易くなるのかも知れない。
つまり、この『同期』のルールに順えば、互いの頭を
LAN ケーブルでつなぐような事になると思う。

400m track に例えると、最後の直線もう残り僅
かになっていて、Spurt の準備に入るところとなっている。
そういう意味では、この世の成り立ちについて可能な
限り本筋に近づきたいものである。身体を失くせば何
処に向かうのだろう。この事が理解出来れば、今この
瞬間に自分が何処に向かえば良いのかも分かるような
気がして来た。もう、自問自答は勘弁してもらいたい。
最近、同じところをぐるぐるとまわっているような気がする。
いつだったかパリの北駅前のロータリーにタクシーを降り
て、この周囲に目指すホテルがありそうで、さて右にま
わるか左に回るかと思った瞬間に『あの建物』と、分
かった事がある。もっと前、山手線の板橋のホームに着
いた時、疲れ切っていて『今から目当ての会社を探す
のか』と思った時、目の前に青い屋根が見え、何故か
は分からなかったが駅を出てその建物の方向に進み、
着いたらムソー株式会社の看板が掛かっていた。今思
えば、無謀な話したが、何故か疑いもせずその建物に
向かった。徒歩で 5 分程度だった記憶だが、それでも
応接室のソファに沈むと、営業資料をテーブルに出
すのが精いっぱい、声を出す事も出来なかった。

では何が・・・この直感とは少し違う頭に浮かぶ事実、何に依ってもたらされているのかを整理してみると、自らがいる位置と情報が収まっている位置が別な場合、勘を働かせてその情報を取得に行き、引き出して来た事実が直感で、でもそんな面倒なこととはしなくても、それは、実際は自分が位置している所は、情報が集まっているその真ただ中なのではないかと思える。

そう思うから、映画の『インターステラー』も納得出来た。知らなかったが脚本のジョナサン・ノーランは、監督のクリストファー・ノーランの弟らしい。兄貴も兄貴だが、弟も弟で、調べてみれば変な脚本が多い。つまり、この目に映る世界の捉え方が像として映る以外に見えない構造がそこに存在している事を前提としている。その見えない構造へ何かの切っ掛けというか、もちろん映画は結構具体的にその理由付けをして、そこに突入し素のままでは解決できない事を解決してしまう。

私の実家は本屋だと何回も書いて来たが、前の道路が昭和 38 年に拡張となりそれを機会に家を新築し、それなりの本屋の店構えとなった。小学校 3 年か 4 年の頃で店番をするスペースの後ろがガラスの引き戸になっていて、そこを開けるとリビングになっていた。新築間無しに母親が店番をしているその後ろにガラス戸を開け放し腰掛けていた。不意に『おかあちゃん、この店になったら一日に 1 万 5 千円は売れなあかな』と言った。母親は驚いた顔で何も言わずジッと見つめてきた。そして、ほどなくしてその程度は売れるようになった。母親は覚えていたらしく、そりゃそうだろう 10 歳の子供のセリフじゃないし、その数字も大人顔負けの鋭い数値を言い当てれば、でその記念すべき日に『昨日の売上は 1 万 5 千円を超えたよ』と言ってくれたのを覚えている。考えて言った訳じゃない。勝手に言葉が口から飛び出ただけで、もっと言うなら別な誰かが言った。それからしばらくして、何かどうしても買ってほしい物があったのだろう。だけといつものセリフ『不景気だから』と買って貰えなかった。前々から考えていたが言わずに我慢していたセリフが、今度は意志を以って出て来た。『本屋なんかしてるからや。八百屋でもすれば不景気でも、食べるものやからみんな買う』と叫んだ。

この時ばかりは父親が血相を変えて怒った。後にも先にもどつかれたのはこの時だけだが、頭を 2〜3 発殴られた。確かに本屋を継げと言われたが継がず、いつの間にか八百屋になっていた。なってから、この下りを思い出した。それからしばらくして、6 年生になり学校の宿題で『未来の自分を作文する』事になった。これも過去に書いたことがあったかもしれないが、街にも田舎にも、どちらかと言われればどちらにも住めない。多分、その両方を行き来していると言った。表現として郊外と『郊内』と書いて、その作文をリビングに置いていた事務机で書いてそのままにしていた。父親が読んだらしく『郊外という言葉はあるけど、コウナイという日本語はないぞ』と教えてくれた。御存知の通り、これまたこの 20 年ほどその通りの暮らしをしている。

『よく見てますね』と人からよく言われる。何かを進める時、それぞれがどの様に考えているかが分からないと、為すべきことも為せなくなるので、その時々で考える必要のある顔が脳裏に浮かぶ。そうするとその人を取り巻く色々なことが頭に浮かんでくる。ひょっとすると本人は特にその様に考えていないかも知れない。そこに時系列は存在しない。何か塊りとして感じてしまう。

草野球に夢中になっている時、1 塁走者でいると投手が打者に投げるか、牽制球投げるか、それが 100 発 100 中で当たるコツをつかんだ。投手は誰しも吸った息を腹の底まで下ろすと打者に、胸で止まると牽制球が来る。これは誰でも見える筈。そうすると身体の何処でもいいから少しでも動けば GO である。そうこうしている内に身体の一部ではなく、その周囲のオーラとでもいえば良いのか、空気が動く GO である。2 塁を盗む時、10 中 8・9 ボールは 2 塁に来なかった。投手がモーションを盗まれれば捕手は慌てるか諦めるからだが、多分古来の武道はこういう世界観を『間』と呼んでいるのかも知れないが、この間がワームホールのように異世界への通路となっているようにも思える。時と光という名の二人の青年が主人公の中国発の『時光代理人』というアニメがある。過去に行けるが、未来にも行けるのかどうか知らない。

有限会社アルファ 吉田清一郎